

平成26年度 防衛大学校入校式
防衛大学校長式辞

本日、防衛大学校は、新たに、本科第六十二期五七一名、大学院理工学研究科前期課程五三名、同後期課程九名、及び大学院総合安全保障研究科前期課程一八名、同後期課程五名の学生諸君を迎え、ここに入校式を挙げるはこびとなりました。新入生諸君の入校に対し、本校をあげて歓迎いたします。本日の入校式に当たり、武田 良太副大臣をはじめ多数のご来賓、そして全国から数多くのご家族・ご親族のご臨席を賜りました。ご参列くださいました皆様方に対し、本校を代表いたしまして、厚く御礼を申し上げます。

本年もまた、嬉しいことに、本校にはアジア諸国から数多くの留学生諸君をお迎えすることができました。カンボジア王国、インドネシア共和国、ラオス人民民主共和国、モンゴル国、フィリピン共和国、大韓民国、タイ王国、東ティモール民主共和国及びベトナム社会主義共和国からの留学生諸君、防衛大学校への入校を心から歓迎いたします。諸君は、今後長期にわたり本国を離れ、異国の地で生活することになります。慣れないことも多く、不安も多いことでしょう。しかし時が経つにつれて、諸君にとって防衛大学校が真の母校となり、そして日本が第二の故郷となると確信しています。諸君たちが私たちの良き仲間となり、立派な防大生となるよう、私たちも努力することを誓います。諸君たちもまた、私たちの中に積極的に飛び込んで来てください。

大学とは、一般に学問の府として位置付けられております。「学問」とは、言うまでもなく、森羅万象の原理を解明する知的なプロセスを指しています。近代以降、「学問」は「科学」（サイエンス）として認識されています。福澤諭吉は「サイエンス」を「実学」と訳しています。つまり、福澤は、人と社会の役に立つ実践的な思考方法を「サイエンス」と考えたのです。福澤諭吉と言えば、誰もが『学問のすすめ』の冒頭の一節を連想します。

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり」（『学問のすすめ』岩波文庫）。

この一文は福澤の思想の根幹を表しているかのように一般では理解されていますが、実はそれは正しくありません。この一文にあるように、これは「云へり」であって、福澤が言っているものではありません。福澤の本当の主張はこの一文のあとに書いてあります。それは次の部分です。

「されども今廣く此人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、尊い人もあり、下人もありて、其有様雲と泥との相違あるに似るとは何ぞや」。

つまり、人間は生まれながらにして平等なはずなのに、「天の上には人を造らず、天は人の上に人を人の下に人を造らず」この部分ですね。平等なはずなのに、どうしてそれぞれの人間模様が異なるのかを問うているのです。その解答として、福澤は、「されば賢人と愚人との別は學ぶと學ばざるとに由って出来るものなり」と言い放っているわけです。福澤は平等の側面を強調するよりも、むしろ人間の生きざまや運命の違いに注目し、そこに学問の有無を結び付けているのです。

新入生諸君は大学に入る以上、徹底的に学問を究めなければなりません。教養科目とそれぞれの専門科目を学習することを通して、諸君は科学的思考を身につけ知性を磨き、賢人への道を目指すのです。

しかし、防衛大学校は一般の大学と異なり、学問だけを究めればよいわけではありません。本校は、国の平和と安全を守り、人々の安寧を陰で支える自衛隊の幹部を育成する士官学校であります。周知のように、日本を取り囲む安全保障環境は大量破壊兵器や海洋等の問題をめぐって厳しさを増しており、今後短期のうちに改善される見込みは低いのが現実です。また、我が国は自然災害等の面でも多くの危険を抱えており、いざというときに速やかに対処できるよう常日頃から準備しておかねばならないのです。

であるがゆえに、幹部自衛官を育てる本校では、学問習得に加えて、体力と人間力を鍛えることにも重点が置かれています。それは各種の訓練や学生舎生活、あるいは部活動ともいべき校友会などを通して会得することになります。健康な体は人間行動のすべての基礎であります。そのため、本校では特に時に過酷な訓練が課されます。それは、体力を強化することで、今後の長い自衛官生活の肉体的土台を作るためであります。

そしてそうした強靱な体力を前提に、人間力が育成されることになるのです。健全な肉体にこそ健全な精神が宿ります。人間力とは、他者を惹きつける、あるいは他者に影響を与える人としての魅力であります。防大卒業生は幹部自衛官になることが運命づけられています。人間的魅力を欠いたリーダーを抱える組織はやがて機能不全に陥り、人間的魅力を備えたリーダーを擁する組織は有機的に機能します。

では、人間力をいかに創り上げたらいいのでしょうか。人間力とは、一言でいえば、人間としてのバランス感覚であります。それには、先ほど述べた知性に加え、幅広い教養を備えることが必要です。そのために、新入生諸君は視野を狭めることなく、文化や芸術などにも関心を広げる余裕を持ち、そして何よりも読書に励んでください。また、国際感覚を身につけることも重要です。今後、国際性のない幹部自衛官では、幹部として失格です。その際、英語力は最低条件であります。外の世界を学べば学ぶほど、世界観と人生の幅が広がるにちがいありません。

以上のことを要するに、防衛大学校は、自身を抑え、国と人のために身を挺して働く公僕を造り上げる場であり、そのために知・徳・体の三位一体を目指す。これであります。防大生の矜持 pride それとは、つまるところ、正義感と justice と、それから情熱 passion、この二つであります。時の流れに迎合しない、このような学校が日本にもまだ存在しているのです。その意味で、本校は数ある日本の大学の中で、圧倒的に強烈な矜持を持った最後の砦ともいうべき大学なのかもしれません。

新入生諸君、君たちはそういう大学の門を叩いたのです。ここから先、諸君は強い正義感と情熱を持った立派な防大生を目指す以外の道はありません。しかし、それは私たちが与える教育や指導だけで得られるものではありません。それは諸君たちの心の持ち様次第です。諸君が今後防衛大学校生としてどのように、そしていかに成長するのか、それは君たちの意思と創意と工夫に依るのです。

大きな幹部自衛官を目指した長い道のりの第一歩を印した新入生諸君の門出を祝して、改めて、声高らかに申し上げたいと思います。

防衛大学校にようこそ、入校おめでとう。

平成二十六年四月五日

防衛大学校長 國分 良成